夢市郎兵衛明石志賀之助事　一丁
秋色桜并短冊　三丁
元祖国十郎傳并肖像　五丁
浅草大地蔵石燈籠　九丁
浅草楊枝見世始原　十丁
白炭忠知　十丁
三浦高尾考　廿一
万治高尾出生地　十二丁
薩摩小平太　十三丁
虎屋七右衛門芝居　十四丁
英一蝶大津画賛　十五丁
大高子葉烟管筒　十七丁
深見十左衛門傳　十八丁

近世奇談考

四

きらのほん

近世奇跡考巻之四

江戸　山東軒主人著

袴塚庫　東洲庫

一　夢市郎兵衛明石志賀之助事

市郎兵衛ハ強氣の男達。志賀之助ハ大力の相撲取ふてぶてしく寛永中をさかりに西ゝ者。おのゝ時仁王仁太夫といふ者あり。凡人ふとめ大力ふて。ちから知ぐ。其比京都の相撲ふ志賀之助と仁太夫ともに人をかさる。志賀之助兼て市郎兵衛と友ゝる西ゝ撲の後見をゝのゝ連ゞちて京ふ上る東の大関ハ仁王仁太夫西の大関ハ明石志賀之助。已ふ日ふりゝ者ハ土俵のうちにあゝ心時市郎兵衛志賀之助ふ對していはく。今日ハ你一代のゝ勝負ゝ。もしまけあバ。ゝゝゝに你を殺す。我ハ腹きりて死ぬべしよくゝ

夢の市郎兵衛
惡悲車文 欺富

心得へしとうふぎて行事團扇をうりれば。あ人うちむらい去ば
位を入合て。やと一声さけび。ぐひ組てもみあふに。市郎兵衛八去
ぎらぎら。目をちぶさぼしてつけまる。時に仁太夫力やまさりけん
志賀之助を引むをびつてさしあげてあぐるうち。見物の諸人あ
みあせをあぎり。あやうきかもふ。志賀之助早業の達人なれば。空立
中みてひらぐり。おちさまの仁太夫が胸を蹴て土俵のまん中ふうち
うふきこれより志賀之助。日の下相撲開山と名告るすをゆるさる
志うるに。仁太夫うらの怨葉なり。これを意恨ふかもひ。志賀之助を打
殺んとうちうるば。市郎兵衛つつけて。志賀之助をバ志のびゆ糸江戸
五下ト世おのれハ黒繻子の羽織の背ゆ明石志賀之助と金糸を以て
大文字にぬハせうを見ー熊谷笠をあぐらゆ立て出さ刀を

ぐらんの木ゆおび唯獨京都を発足さて。仁太夫がさの志ものら等。此あうさ
を見て氣おられー。ををむあーくこぐ舟りるうそ。市郎兵衛
老後頭をううて。相州田村の邊ゆ隠遁ーるる。兄放駒の四郎兵衛。
分まううーと雪。今ハ世ゆおもひ殘をうあーとて。仏間ゆうもり
居て食をうも。念仏のみとあうて形ーりううん

古今侠客傳ゆ

見えうう

二　秋色櫻の井短冊

秋色ハゆ細町菓子屋のひさあ。幼名を秋うふ。十三歳の時。上野の花
見ゆううて。清水観音堂の邊井の端ゆあり。犬般若とゆ櫻をうえて
井のぐうの樣あぶうーゆの酔
ううぐうみぬ。おうしより後。その櫻を秋色櫻とゆ名るる。沾涼が記

に人面。役樹老木あて。六十年ぞ。以前ハありしとぞ。窯ふぶ秋。貞享の比。其角の門人〻ゝ。秋色といふ。後ハ俳諧の判者とゝ。菊后亭と号ス。つひに其角の点印を附屬ス。いつを昔ハ夢ゆめとして。蜆ゝ早苗ハ夢ゆめ女哉といふ句あり。是秋色。其角ハ入門の時の句なり。

夢中菴夜話ハ人〻〻〻

○再案。秋色ハ寒玉俗称詳といふ者の妻ゝ。男女ハ母ゝの子をゝあり。一男俳号を林鳥と云。二男俳号を紫萬と云。ともに俗称詳ゝ。孫女を富といふ

秋色享保十年乙巳四月十九日申刻辞世

見ー夢ゆさめてゝ色のみきつゝ　秋色

以上秋色追善句集両三声ゝ書ハ又色。その書。其瓜菴主人藏ゝ

秋色短冊　秋色の墨跡をふハゞまれ〻ゝ書画房の長ゝ短冊の句を左ハ摸出ス

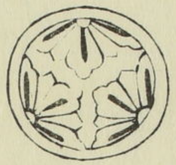
武士ハ見てみらてこうす　秋色

古ハ人ゝとゝき方ゝ見ゝ時の口ゝきみのよー　秀吟おもきうち
つゝて人の賞ゝ美せー句人

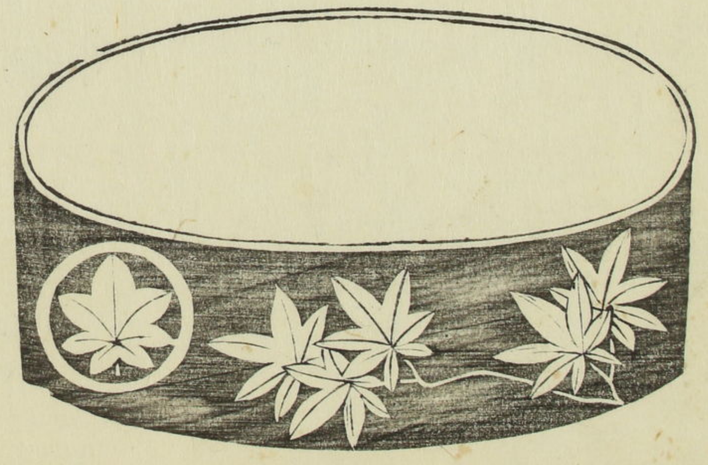
三　高尾所置髮水入圖

○此器ハ今より三十七世ゝ以前ゝ吉宗の駿河屋魚躍と呼ぶ者方圓菴得器を おくりあるゝをもらひ給ふ某君手ゝ入 まつりしとぞん某君手ゝ入るゝを好めるゝをきらせ給ひ古書画古器等をとゝのへしめ給ふついで此器をもとゝのへ給ふかゝる小器を後の世ふ傳へて人の名ゝ高ゝまゝに高尾ゝ木ゝれとゝふべし魚躍ハ烟花清談の作者ゝ

○表蝋色紅葉金蒔絵
紋かゝ貝内朱ふち金ゝ
口長さ一寸三寸四分横二寸二分



裏ニカクノ如キ
紋アリ



高一寸一分

四　元祖團十郎傳并肖像

江戸の俳優初代市川團十郎ハ堀越重藏と云ふ者の子なり慶安四年辛卯江戸ふ生る重藏ハ下総國成田の産（或云佐倉幡谷村ノ産役者大全ニ云市川村）なり江戸ふ住す曾任侠を好ミ幡隨院長兵衛唐大十右衛門と友ゝ團十郎生れて七夜ふあゝる日唐大十右衛門彼ゝ幼名を海老藏とあづけゝるよし（今の白猿ものゝあはれ）初名を段十郎ゝゝび後ふ團十郎ゝ更む曾俳諧を好ミ四德翁才麿の門人ゝ成ゝ俳号を才牛ゝ云ふ。延宝のゝゝめ。和泉太夫金平人形のゝゝゝきを又て荒すゝゝふことをかゝもひつゝゝゝるよし（侠客傳）延宝三年五月。木挽町山村座凱歌會曾我ゝ云ふ狂ゝ云ふ曾我五郎の役を始てつゝむ時ゝ年二十五才延宝八年不破伴ゝ左衛門の役を始てつゝむ時ゝ年三十才衣裳の模様ゝ云ふ稲妻

のるのむきハ「稲妻のむしろまでみたり不破の関をいふ白ふもちづつなる
よし　江戸著聞集　ふ又曰貞享元年鳴神上人の役を始てつとむ時年三十四
鳴神を堕落さする女の名を雲の絶間となづけしハ団十郎なりとぞ
つたへられたよし。これ筆を以て其才の秀たることをしるべし　元禄七
年イ二六年京ふ上り同十年江戸ニ下れり
○貞享五年役者評判記　野郎立役二町弓　といふ書ふ左のごとくあり
○此ころのひやうばん記ハ皆小く半紙本也位付なし元禄の末横切本となり位付あり

▲市川団十郎　住所ふさかい町なり

此市川ハ江戸ハ三千世界ふならびなき。好色第一の好ぬ男ふて器量なりぶあなし丹前のなりこゝふ又すくれたりふ天下ふ其貝く。およそ此人ほど出世なさる藝者又とあるまじ。実事悪人其外何事をさせても。あちらもこちらもこゝろ字文の達者ふて仕組の娘を知りぬものなし当世丹前役者の元祖。お江戸ふおいて加さをならぶるものなし威勢天が下ふかゞやき。おそらくハ末代の役者の鏡ともなるべき人也。其息く成れも江戸ふて成田むりん敵ふ
市川の流れの水もそゝぎよく語りを聞しく藝ふ老ぬ
おもふ末代の役者の鏡ともなるべきと貞享の比より有ておもしハ役者の未来記ともいふべし

元祖団十郎似顔面形盃

○木ぼりふて大さ皿のごとし
うらの方ふて何とつぶやうにまるものあり
○面ハ白ぬりにて朱のくまどりあり
○眼中ハ金箔玉眼入
○うらの方ハ黒ぬり也

これハやんごとなき方のもちゐ玉ふものにて友人蕙斎主人うつさせてあたへしむ面打のつくるものとみえて殊勝の古物也

元祖團十郎肖像

談洲樓藏本元禄六年板本
四場居百人一首ニ此畫アリ

上ニ狂歌アリ畧之

○貞享年中印板　舞曲扇依

▲江戸狂言作者

○玉井權八　○南瓜与惣兵衛

かくのごとく作者のうちゐもかぞへあり

作おわり

○宮崎傳吉　○市川團十郎の荒園の役切り狂言作者

○江戸真砂ニ云　寛延中写本ニ

元録年勘三郎座ニて市十郎荒園の役切り狂言ゐ

大当りせしゆゑ鍾馗大臣ゐ成て。

ありくおのれ七八才のころ鍾馗大臣市十郎とよびてちまちまを賣

役者絵をかりのでぬ云　元禄十七年改元　宝永二月十九日死。享年五十四。芝三縁山中

○市十郎　常照院ニて葬る。法名門誉入室覺栄

○柳塘館藏本宝永二年印本　宝永忠信物語

一周忌追善の書ゑ。その書ゑ云

と云草紙五冊あり。元團十郎

市村竹之丞芝居。八島壇の浦の仕組忠信四番續の狂言ゐ市十郎次信

の役をつとむるうちに。朝廷九日五十四才ゐて死まする。幼名を弁之助

ゑ。ゑ。ゑ。又云ゑ。然則星合十二段とゐふ狂言の時死せしと云說ハ

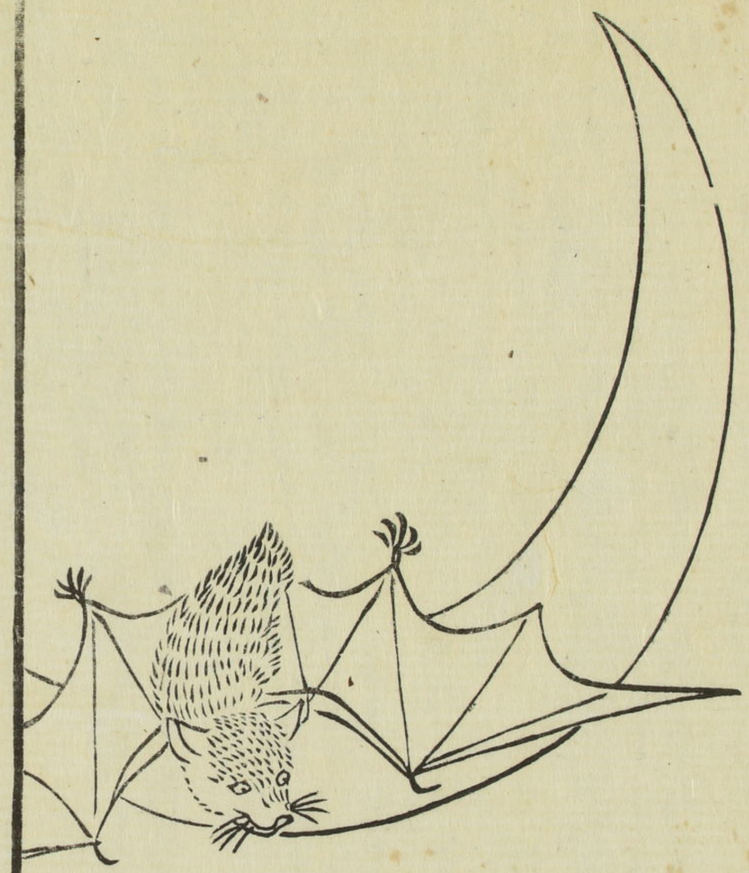
非歟

○元祖團十郎實子。二代團十郎栢延ゲ傳ハ。あゐぬく人のゐれるゐ

ゐ。ゑゐハもとしつ。今已ゐ名跡七代ゐ。ゐ。ゐぶハ誠是俳優の名家と云べし

五

一蝶贈宗珉文



右書中ハ有りの畫ハ有り上の下絵に横谷宗珉筆一幅ハ下絵をもつて
有り上の[illegible]人の知る所に一隙が手紙世ふ[illegible]と[illegible]題
[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]ー。[illegible]嵩谷翁の鑒定をへて。正筆の[illegible]

㊅ 浅草六地蔵石燈籠

浅草花川戸の町口ふ。古代の石燈籠一基ありて。袋ふ六地蔵を刻
む。竿石ふ文字あれども。磨滅ーて讀ぐーー。ぐ[illegible]ん十月二十二日
兵衛ふ云ハ字。おぼろげふ[illegible]ハ。江戸砂子増補ふ。鎌田兵衛政清寄
立の銘ありしよー云傳ふ[illegible]。縣の一本ふ。近衛院の浄宇左馬
頭義朝。觀音浅草寺の飛ーつりふ。榎を以て。觀音の像をつくり
立ふ。今ふ内陳ふあり。臺座ふ。鎌田兵衛政清奉行とかきつけあ
りふ。此説ふよれバ。彼燈籠も。ふ節鎌田ハ寄立せーもの歟。燈籠
の銘磨滅ーふれバ。推量の説のみふて。決定ーがーーふへぐ。古

[illegible]

但[illegible]

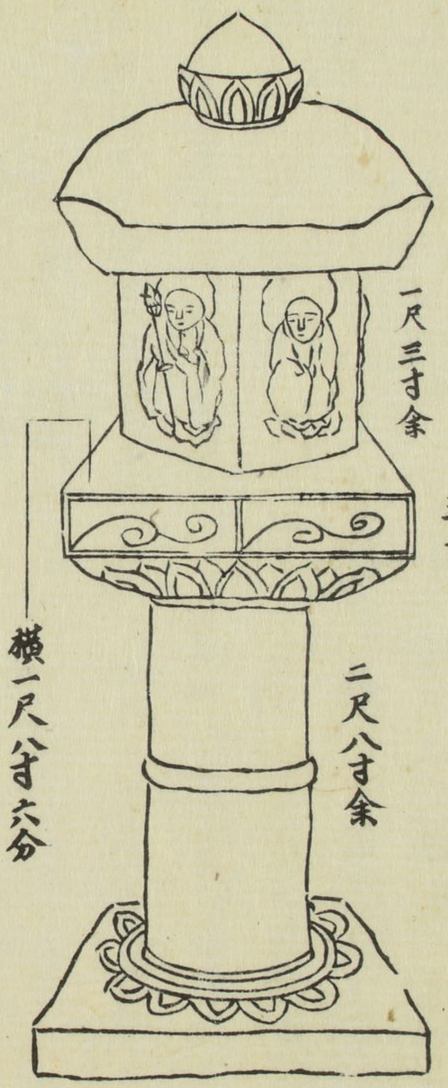
[illegible]

正[illegible]

[illegible]

一[illegible]

浅草六地蔵石燈籠　笠石大袋并ニ大袋の臺石ともに一石を以てつくる竿石と沓石のみ別石之奇巧とすべし



物なるべしとのこと。六地蔵を造りしとみゝ。古きより伏見の六地蔵ハ少納言信西の建立之城南竹田北向不動院の六地蔵をかりうつる石ふ暦應の年号あるもあるべし。此ごとくひろかるべし。昔八石灯籠を一基造りしと。今の世のごとく堂前の左右ふ両基造りしハ。ふ一へ。ふきよりの浴北鞍馬の堂前尾張熱田の社前南禪寺の大石燈籠。ふ一基之彼六地蔵の燈籠一基あるも。又古き話之彼是考ふるふ古物あるすくなくひとし。

事跡合考

つくへて云普ハ霞殿ヶ関ちよび平川町の方より。観音門前馬次ふてみふ蔵宿町之今存在の六地蔵石灯籠往古よりの馬駕籠の立場之云。ふ。市中ふ多ふ古物の残ふるハめづらし。冒を上ふあゝハ古。

○再安ふ彼地の古老ふ問ふ。ちゝ回録ふ後年号磨滅せ。其

以前ハ應安元年ヨリ云文字カキ[illegible]ヘ云。然則鎌田ガ寄進ヨリ云ハ。
安説ヨリ。應安ハ後光嚴帝の年号ニ。應安元年ヨリ。文化元年に
いたりて四百三十七年ヲ経よべり○山の宿ヲ喜暦四年の古碑ヲあぬバ。應
安の時代ヨリもあるべし

⑦ 浅草楊枝店始原

寛永の比ハ。店ヲカマヘテ。ちいさき長櫃ヤうのものヲ人ヲ茶筅ヲ楊
枝をあトべおきて。賣りるよし。ごとく比の者十余人今ヲ楊枝をあきなひ
て獲親ヲ[illegible]。或ハ役店これ櫃の上ヲ物を賣ヨリる証の今に残めるヲ。今
觀音堂ヲおきて。追儺ヲおこなふ時。鬼ヲ拾ヒるハ。彼楊枝親等の
つとむる古例ヨリ。ものヨリ。以上浅草菴主人。彼ひつちやのうち古老のもの
説ヨリ。
つ案ヨルニハ。ハヒて茶をのこ。ちるヨルハ。茶筅ヲトヽフ人今ヨリ。もおホヨリ一
しん。ヲ寛永元年ヨリ。文化元年ヲ。一百八十一年のひヨリ。ぞヨリ

⑧ 白炭忠知

滑稽太平記ヲ閲ヲ。神野忠知ハ。江戸の人ヲ。俗称長三郎。後ヲ長左衛
ヲ改む。承應の比。井坂春清立圃門人ヲ俳諧ヲ学ぶ

白炭やかゝあむりヲ乃雪の枝

此句ヨリ白炭ヲ云名ヲ[illegible]ぬ

甚角ヲ雑談集ヲ。白炭ヲ[illegible]ヲ忠知ガ

霜月やあるハあき月の影法師

ヲ辞世ヲ。腹切ル。ぺヨリヲ。せヨリ。ヨリる浮世ヲハ。ぬりん哀ヲ。あぬバ。を
ヲをよくせぎヨリ。ヨリ

⑨ 三浦高尾考

寛永二十年印本吾妻物語元吉原細見記ヲ。ヨルヲ。元吉原の時代。高尾と

なる妓女四人あり。江戸町善左衛門内高尾。京町若三郎内高尾。同町九郎右衛門内高尾。以上みなはし女郎にてもとより三浦の高尾にあらず。その以前高尾といふ名妓あらバ四人までもし女郎の名によぶべしともおぼえず。三浦の初代高尾ハ寛永の後いできたるなるべし。今杏園先生の高尾考にもとづき。古書を参考して年序をさだめ。好事家の考訂をまつのみ

初代高尾 ○元吉原の時代引揚なき によりてつまびらかならず

二代高尾 ○数代のうちにすぐれて名妓のきこえ高し。これを万治高尾といふ貞享板[江戸鹿子]の説を用て。二代とさだむ。万治三年十二月廿五日死或云万治二年十二月五日死

三代高尾 ○[袖かがみ]に。高尾を評していまだ年わかきハひとへにかぐさきの二代高尾におとれりと。あるは以て三代とさだむ[袖かがみ]ハ年号なききものにて。時代つまびらかならずといへども。延宝四年板なり[ゆづめ石]にも高尾ありて今ハそしりけれども此高尾寛文のまゝ系

四代高尾 ○きさらりにへうちべし。天和三年の写本[紫の一もと]に。高尾に此今ハなしとあれば。天和のころハ中絶なるべし
○元禄四年板本[幕ちらひ]に。高尾あり。元禄七年板本[草まくら引]にいつやかづらひよりふるまくおもはりのよし ふるまじあればこの高尾。元禄五六ケ年のうちに出廓せしならん

五代高尾 ○元禄十二年春出廓のよし[元正間記]にみえたり

六代高尾 ○宝永六年板本[大黒舞]に。六代の高尾とあり。證とすべし。宝永七年春板。一枚摺細見[大鑑]に高尾あり

七代高尾 ○引摺までつまびらかならず

八代高尾 ○正徳三年板本[赤染]に。高尾あり[丸かがみ]に。正徳五年高尾ハできしとあれバ此高尾正徳四年出廓なるべし

九代高尾 ○享保五年板本[丸鏡]に奥州がかぶろなのぶを高尾とあるも。これ元祖より九代目の高尾なるよし。たしかならず。正徳五年太夫とあるも。これ元祖より九代目の高尾ありし證とすべし。○宝永六年板本に。六代の高尾ありて[丸鏡]に九代の高尾。正徳五年いでしとあれバいづれ五年にて同じ。七代八代も高尾二代あるにやいぶかし

十代高尾 ○享保十三年板本[細見の図]并に[両巴巵言]に。高尾あり。二代とも出廓せしにや
享保十五年板本[両巴巵言]に。高尾なし。此高尾享保十三十四一本にもなし。高尾享保十三十四

十一代高尾

去年の同に勤あるべし○九代め高尾も同人のやうにおもはれどもかの九代め高尾正徳五年に太夫となり享保十三年まで年数十四年なれバ同人なるべからず○享保十五年より同十八年までの細見記をとあるべからず高尾なし此間四年中絶え

○享保十九年 細見記 三本あり二本に高尾なし一本 全盛鏡 といふにたか尾ありてあげまきが内ならびや當年十月九日。太夫となりくるよしをしるせり。又享保二十年秋本 新家位名 見といふにもあげまきがかたおがやたか尾にあつかるよしをしるしたり。しかるにこれバたかふハち此高尾享保十九年十月九日。太夫となりてより六年を經て寛保元年六月四日出勤せり。うけ證文を今に藏せる人あり○此後の 細見記 をあらためてバ見えずに。たか尾なし。十一代めてさえくるすあげうけし○宝暦五年細見 入相の花 に三浦屋ありて同七年細見 花くらべ に三浦屋。宝暦六年家ぬけより

(十) 万治高尾出生地

万治年間の名妓高尾ハ下野國下塩原塩釜村 江戸をさることおよそ四十里 の産なり。父を長助といふ。○子孫今にありとぞ 高尾万治中。江戸にて身まかりし時。かたみの物をもて故郷におくりしとぞ。その物失ひて今ハちりぢりなりの物も

なかめて只高尾みづから筆をそめて伊勢源氏つれづれのくさひを。抄書せし一軸のこ残れり。これハ彼在世の時。故郷におくるものにて。まことの手跡にしてかれがおもかげを今見ることごとくおぼえなるものなるぞ 以上塩原にある湯盛といふ人にきゝて書しつ

○筆のついでにしるすおなじ比高尾をさくりしとあるによりて三浦の屋雲ハ信州埴科郡鼡宿の産之事が筆勤集にくわしくあらはせり

(十一) 薩摩小平太

事跡合考 に云紀州の人小平太と云者。堺町薩摩坐ノ始祖 江戸に下り中橋の廣小路。ひろき藪原なる所に芝居を立。人形をまはせて。諸人に見せしは是寛永年中の事也。これより小平太が人形。ある土偶ありしが。通四丁目に京都より下りて。江戸中に唯一人渡世しける人形師。鶴屋といひし者ありしにや付て。不残木偶人形をしたてたるとなり

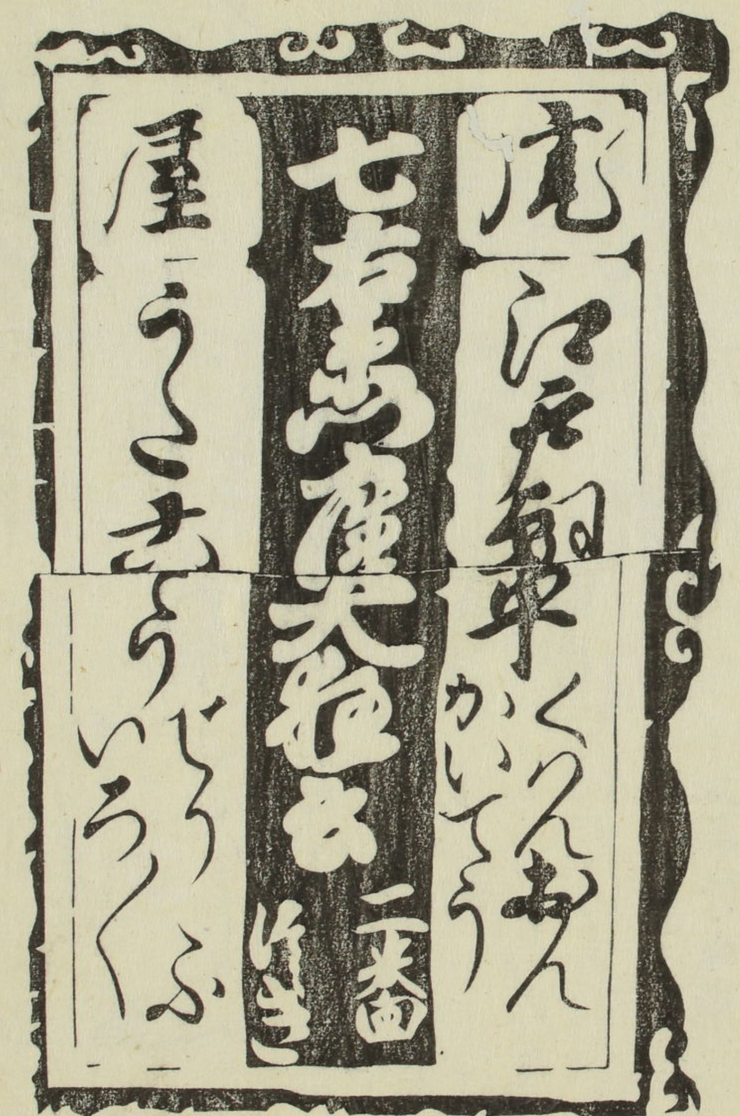
高尾
揚屋入圖

小平太紙の幕を用ゐる云〻
其頃の質素を見るべし。

十二　虎屋七右衛門芝居

昔淺草寺境内に虎屋七右衛門と云歌舞伎芝居あり一よしつねの狂言をもどり小歌ぜりふをかきこむ古き板木を松蘿館主人得て硯箱につくれり年号あきらかなりて時代つまびらかなるべし寛享四年淺草観音開帳あり其のころのもの歟

其板木ヲ摺うつして左に小歌ぜりふ或狂言の絵をあらはす校磨滅して分明ならざるもの多し



松蘿館所藏

十三　英一蝶大津繪讃　繪畫

此絵ハ一蝶ゞ筆ニ成ル
其の大津絵ニ一蝶
賛辞をのゝ
くきつけ給ふ

山東軒所藏

右繪の上に左の如く賛辞あり

大津繪の
畫ふり
花の
流
是

英一蝶讃

十四　浮世又兵衛江口君圖

紙中長二尺七寸五分横一尺五分
繪畫ニテアラハス　山東軒清翫

かけ衿朱ぴつこと此庶子こうハ衣黒地紋金泥
ちさかさね銀泥帯緑青鮮形金泥

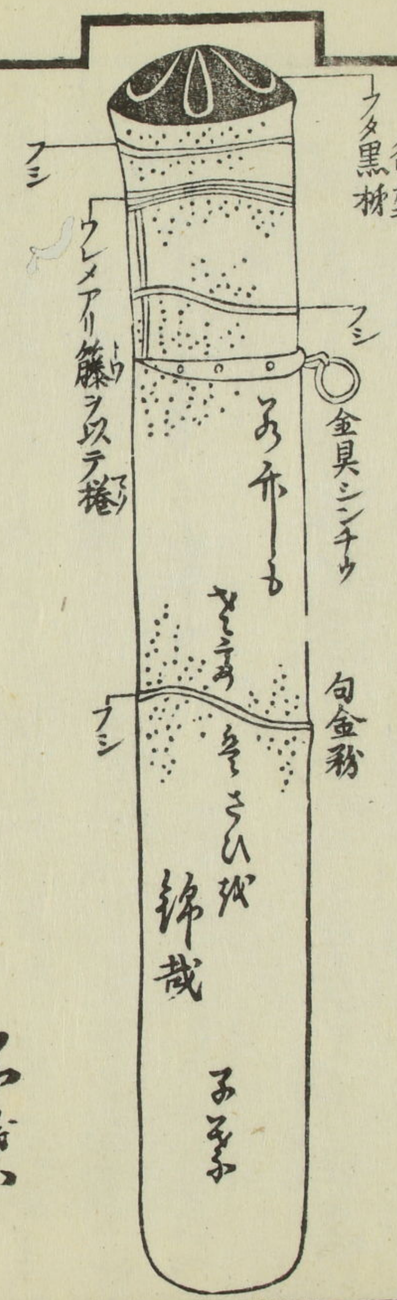
十五　大高子葉烟管筒

下ハ置をあふハ。烟管筒ハ大高源五。常ハおぶる所の物なり。京師ハありし時。ぐぐりふ俳諧の句をかきつけて。ハ野寺氏の僕。久右ゑつ三者ハあふ。久右ゑ後ハ金粉を以て。ハを修飾し。けるよ。京四条室町河津氏こハを得て秘蔵しるを予が好古の癖あるをきゝて。これをゆづる。別ハ傳系の書ありまいへども。ここハ略す

窯るふ。大高氏。俳諧を。水間沾徳の門ハ学びて。秀吟なり。沾徳が文蓬莱其角が焦尾琴類柑子等に。其句あまた見ゆ。沾徳。初号を沾葉といふ。ゆえに。大高氏の俳名を子葉といへり。富森春帆。神崎竹平等。おなじく門人なり

子葉烟管筒圖

胡麻竹長八寸五分メグリ三寸五分



山東軒所藏

十六　深見十左衛門傳

深見十左衛門本姓八深溝。名八負國。寛文の比江戸ホ六方男達ニつゝふものあまたあり。其徒の〳〵ちゝ強をたゞき弱をたすけ人の危急を見て。ちからハぞとつゝふるあり。曾俳諧をたゝ〳〵延宝年中。雅波の梅翁宗因。江戸ホ下りし比其門ホ学ふ一時の句ホ

名月や来て見よゝ〳〵の額際

身のこゝ〳〵ろ男ありしが額ハひろくぬきあげたれバ此句ありき

比の小歌ホ額のさゝの前〳〵見えぬを来て見よゝ〳〵の工とゝ〳〵

こゝ〳〵ろ

梅ちれや花橘ハかゞ〳〵ぬ

天和の比也。名ありて謫せらるゝ。豆年春の句に

此句吉兆とゝ〳〵廿八年を過て宝永中帰郷せ老年ホおよびても

二尺四五寸の朱鞘の大服をたゝふさぞ。形容年より若く見えて。氣力壮年の者ゝ増りしとぞ。つゐゝ剃髪して自休と称ず菩提所本郷片町龍光寺のうちゝ菴をたてゝ住ぬ享保十五年三月十八日没享年九十歳。龍光寺に墓碑あり一憊院心渓自休菴主墓とあるなり。傳へて云十五歳若りし時人を打あひむゝふ歯を二枚かさねるが金を以て入歯をつくり入しとぞ

以上 古今俠客傳 洞房語園 の説ゝ予が考へをくゝえて。かき付つ鬚の意休 矣ハ此人のまゝ

奇跡考巻之四終

孝経楼